
秋の風は真っ白で

曾口十土

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋の風は真つ白で

【Nコード】

N7246S

【作者名】

曾口十土

【あらすじ】

銀の十字架をポケットに突っ込んで、遥人はるとは街を歩く。置き去りにされたものを見て、音にはならない声を聞く。そしてしばし立ち止まり、遥人はまた歩いて行く。

「わたしは待ってるの」

少女の言葉を聞いて、遥人は眉をしかめた。なんか面倒なことになりそうだな。そう思うものの、口には出さずに神妙な体を装う。

東の空に丸い月がぶら下がっていた。空気がよほど冷たく張り詰めているのか、そこらの古ぼけた街灯にも負けないほど眩しい。良くないよ、と遥人は困り顔のまま思う。こんなふうには月がぴかぴかと輝く夜には、この少女のように厄介な手合いが増えるのだ。

「だからどこにも行かない。わたしはここにいます」

遥人は首をすくめてモッズコートの外側から襲う寒気に耐えた。路上には行き交う人の姿はない。たまに車道を通る車が、大げさにヘッドライトを光らせて去っていくだけだ。

ガードレールのもとにはガラス瓶がくくりつけられ、枯れかけの花が生けられていた。凍えそうな月光を受ける花卉を見て、遥人は小さくため息をついた。この場所から一步も動けずにいる、少女。「あの人は言ったの。『夏が終わって秋が来たらこっちに戻ってくるから。そしたら正式に付き合おう』って。もうすぐ夏が終わるでしょ？ そしたらあの人が帰ってくる」

場所だけでなく、時も止まったままのようだった。少女の言う「夏」がいつたいいつを指すのか、マフラーを巻いた遥人には見当もつかない。少女のベージュのワンピースが、暗がりにはぼおつと浮かび上がって見えた。

「帰ってきたあの人にすぐに見つけてもらいたいから」

「見つけれないよ」

遥人が言い放つ。少女は訳が分からないといったふうには首を傾げた。

「君はもう死んでる。幽霊なんだ。誰も君を見つけれない」

「おかしいこと言うのね。現にあなたはわたしを見て、話をしてい

るじゃない」

「僕は……その、例外だよ。君みたいな人たちの姿も見えないし、声も聞こえる。でもそういう霊感みたいなのがある人は、ごく稀なんだ」

少女が唇を尖らせてうつむいた。肩に垂らした髪もワンピースから伸びる白い手足も、月の光が青白く染めた。

「なによ、幽霊って。そんなのおかしい。我思う、ゆえに我有り、つてどこかの有名な人が言ってたでしょ？ あの人を待っているわたしは、だから間違いなくここにいるの」

遥人が思わず眉間に指をあてた。世の中はもの凄い速さで進歩していて、去年はノートブックPCが流行りだったのに、今年は電子書籍端末という具合だ。だから哲学書の一節を切り取って小理屈をこねる幽霊が出現するのも、世の習いなのだろうか。

けれども、と遥人は思う。死は区切りであって、無限の時間の中から生を切り取る手段だ。もし人の思念が死のくびきから解かれ、思うことそれ自体で存在しうるとしたら。それはこの少女のように、無限の時間の中に放り出されることに等しい。夏も秋も冬もなく、ただ「待つ」という思いだけを繰り返す。もしかするとそれは、虚無を意味するのかもしれない。

「あなたは、いじわるなのね」

「君だって分かっているんだろ。そうやって君が立っているのに、誰も君を見ない。話しかけもしない」

フン、だ。少女が鼻を鳴らしてつぶやく。やっぱりイジワルだ。ゆらり、少女の体が流れた。柔らかな風にさらわれるような感じだった。風に乗った少女の体は、少しずつ解けていく。青白い少女の顔が遥人を見て、ほんの少し笑ったようだった。

やがれ静寂がもどると、ポケットに手を入れて遥人は歩き出した。望んだ形ではなかったかもしれないけど、ともかくあの子の時間は動き出した。冬を越え、そのうちに春がやってくる。

ポケットの手が、無造作に突っ込んだ十字架を探りあてた。神の

慈悲に似た冷たい感触を確かめながら、遥人は無言で祈りを捧げた。儂い約束に縛られて、時の流れから取り残されたあの子に。もし仮に「あの人」とやらが現れて、先立ったあの子の事を知って後悔の涙でも流していれば。あの子の時間はとっくに動き出していたかもしれないのだ。

嘘吐きも裏切りも背信も、この世にはありふれている。

遥人は一瞬だけ、両目を閉じた。

だけど、せめて魂よ、安らかなれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7246s/>

秋の風は真っ白で

2011年10月9日17時15分発行